



Title	陶潜詩研究：「琴」の語を中心として(二〇一三年度卒業論文要旨集)
Author(s)	佐々木，彩乃
Citation	札幌国語研究，19：71-71
Issue Date	2014
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7625
Rights	

陶潜詩研究

——「琴」の語を中心として——

漢文学研究室 九四三九 佐々木彩乃

本研究は、東晋の詩人陶潜の作品に見られる「琴」の語に着目し、論じたものである。陶潜がどのようなときに琴を弹奏し、どのような思いで琴の演奏を聴いていたのかを探ることを目的とした。

陶潜の作品における「琴」は、隠者の象徴や心を落ち着かせるためのものとして捉えられている。「始作鎮軍參軍經曲阿作」などの作では、同じく隠者の象徴とされる「書」とともに「琴」を詠じ、俗世間から離れた生活を描写していた。また、「帰去來兮辭」などの作で、陶潜は心を落ち着かせるために琴と書物を手にしていた。陶潜の「詠貧士」(其三)という詩には、榮啓期という琴を弹奏する古の隠者が登場する。陶潜はこの隠者を自身の理想の姿として、自身の飢えや死の悩みを解決する策を隠者の生き方に求めようとしていたのだろう。

また、「擬古」(其五)では、陶潜は隠者が奏でる琴の音色を聴いている。この琴を奏でている隠者と陶潜は、『列子』の伯牙と鍾子期のように、琴をはさんで互いの気持ちちを汲み取り合っていた。

このように、琴は陶潜が隠遁生活を送り、心の平穏を保つ上で欠かせないものであった。琴を爪弾き、その音色を聴くことで隠者として生きるといふ志を更に強くしたのである。